

道徳通信

No.18 2023年(令和5年)1月13日(金)



学習日:1月12日(木) 内容:「六千人の命のビザ」

ユダヤ人を救ったリトアニア領事代理杉原千畝さんの妻幸子さんが、夫へのレクイエム(鎮魂歌)として著した回想録に基づく話。国際的に困難を極める時代にあっても、人間として崇高にふるまい続けた先人たちの姿は、国際的な視野に立ち、世界平和に貢献する姿とはどのようなものかと考える例として、とても参考になる。果たして自分にも同じような決断ができるだろうかと深く自問する機会にしてほしい。

【生徒の考え】 授業後に考えたこと、感じたこと

私が杉原さんの立場だったら、日本からの命令が怖くてユダヤ人の人々のためにビザを発給できていたかわからないなと思いました。もちろん、ユダヤ人の人々のために、助きたいという気持ちはあるが、職を失う恐怖があったりして、行動できないかもしれないと考えました。

自分の仕事がかびになっても人々を助けたいという杉原さんの考え方に感動しました。いくら政府に言われても自分が正しいと思う行動を進めていて、自分もこのような自信を持った行動をしたいと思いました。

自分にできることは、いろんな国の人とコミュニケーションを取るのだと思いました。

自分たちが、ビザを発行することはできないので、まずは、自分から差別や偏見をなくしていこうと思いました。

世界中の人々全員が平等に生きていくためには私たち一人ひとりが差別をせずに接していくことが大事だと思いました。

1979年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサさんは「世界平和のために、私たちは何をすべきでしょうか?」という質問にこう答えたといひます。「家に帰り、家族を大切にしてください。」

私たちは杉原千畝さんのようにビザを発給することはできません。しかし、家族、クラスの人、部活の仲間を大切にすることはできます。一人一人がそういう意識で行動することが、世界平和に向かう大きな力になるのではないのでしょうか。先人の言葉に学び、行動していきましょう。